

圖 版 解 說

一 舞 踊 圖

東京 梅原龍三郎氏藏

紙本金地著色 挂幅装
竪六二・二寸(二尺五分)
横三五・二寸(一尺一寸六分)

五彩まばゆく織りなせる小袖を著け、扇を持して立舞ふ女の嬌冶な姿容を描出してゐる。本圖は嘗て故岸田劉生、高崎清一、大島富士太郎諸氏の所藏にかゝる各幅及び大英博物館所藏の一幀と共に、故神田鐳藏氏舊藏の六曲小屏風(四扇現存)一隻に見るやうに、もと六曲小屏風各扇に一舞女を配して描かれたものの如くである。是等の作品はその畫態を一にするのみならず、紙繼の箇所も略相等しく、唯その法量に多少の差異を生じてゐるが、それは改裝不同の爲であらうか。斯の如く各扇に一舞女を圖寫せるは、單幅にても獨立の畫面を構成してゐるが、試に各扇を合せ觀れば、或は左顧し或は右顧して立舞ふ姿相に個々の變化を有しつつ、然も全體に互つて一貫せる律動的調和が保たれて、微妙な構圖を形成してゐる。

翻つて本圖を見るに、色調は當代通途の金地濃彩にて、顔と手は胡粉まじりの薄胭脂に、淡朱もて細く肉線を描いて柔膩な肌を現はしてゐる。小袖は朱地と柿地の色替に、すり箔を施し、浪形模様の黒地に藍、朱、黄とりどりの額模様を散した絢麗な衣裳で、その褶襞はほりぬりにて丹念に描いてゐる。裾に見る足先のくつきりとした粉白は、恐らく當時流行の白なめしの足袋を表はしたものであらう。見らるゝ如く豊麗な顔容に絢爛なる衣裳を著けた、歌舞の媚態を圖寫しつつも、寸毫も卑俗に流れず、寧ろ一種樸茂な畫致さへ示されてゐるは、その筆技の非凡を語るものである。

惜て本圖が何人の手に成るか、他の多くの風俗圖同様に詳らかでないが、そ

の様式よりみて慶長元和の頃に榮えし京狩野の筆餘に成れるものと推せられる。當代は云ふまでもなく擾亂漸く収まりて、享樂的世代に會し、都鄙の士庶の間に歌舞歡樂の盛行を見るに至り、かゝる舞女の妖艶なる姿態が、當代畫匠の好畫題に入り來つたのは想像に難くない。尙本圖に見る髮容の前髪を切り、鬢たぽを出さずに丸く束ねて襟の後に垂れたるさまは、慶長元和頃の風俗と一致する。本圖惜しむらくは小袖の右肩柿地の大部分と左肩朱地の一小部分に蠹損補色があり、また箔の一部が修補されてゐる。(菅沼)

二三 寶樓閣曼荼羅

米國 フリア畫廊藏

絹本著色 額装
竪一四四・五寸(四尺七寸七分)
横八六・七寸(二尺八寸六分)

四 寶樓閣曼荼羅

京都 寶菩提院藏

絹本著色 挂幅装
竪一五七・六寸(五尺二寸)
横一三一・一寸(四尺三寸二分)

(以上矢代幸雄「米國に於ける二大佛畫 下」参照)

五六 後宇多法皇像

京都 大覺寺藏

紙本著色 挂幅装
竪九一・七寸(三尺二分六厘)
横五三・七寸(一尺七寸七分)

纒綯縁の上げ疊の上、仄かに粉白の菊花文を交へて、同じ唐草泥文を一面に散らせた白淨の法衣も豊かに、群青地、泥輪寶文の七條袈裟らしきを著け、幅廣の獨特の横被、或は嵯峨流とも稱すべきかを纏うて、右手に五鈷、左に數珠を爪繰りながら、おほどかに端坐し給ふ御像である。傳へて後宇多法皇の御像